



中学生のころから耳で聴いて譜面をおこしていた土田さんは、アンサンブルのそれぞれのパートの部分までおこせるようになったそうです。現在、狭山ビッグバンド・ピラミッドで譜面全般を担当しています。(入間川七夕まつりでアルトサックスを演奏する土田さん)

ピラミッドのように 人と人との音を積み重ね いつか音楽の頂点を極めたい



HITO

みつる
土田 盈さん
(狭山ビッグバンド・ピラミッド
バンドリーダー)

広瀬東にお住まいの土田 盈さん
市内でアマチュア活動をしている、
「狭山ビッグバンド・ピラミッド」総
勢25名をまとめるバンドリーダー
で、バリトン・サクソフの奏者です。
子どものころから音楽が好きでし
た。電気冷蔵庫・電気洗濯機・白黒テ
レビが三種の神器と言われ庶民の
憧れだった昭和30年代、中学生だっ
た土田さんは、手軽で身近な楽器と
してハーモニカを持ち歩いていま
した。そのころからジャズが好きで、L
P盤を聴いてアドリフまで譜面にお
こすなど、熱心に音楽を聴いていま
した。グリーン・ミラーやベニー・グッ
ドマンなどが流行っていた時代です。
土田さん自身が本格的な楽器を手
にしたのは、社会人になってからの
ことです。お兄さんと共同で手に入
れたのがトランペットでしたが、い

こんなふうには、中学生のころから
ジャズが好きで、ジャズ歴45年の土
田さん。6年程前までは、7人のコン
ボスタイルのバンドで都内で活動し
ていました。しかしメンバーが全員
揃わないと練習にならないことから、
いっそビッグバンドとしての活動に
切り換えようということになり、立ち上
げまでに2年を費やし、社会還元を
目標に結成されたのが、狭山市を拠
点とする狭山ビッグバンド・ピラミ
ッドだったので、大人数だけにま
とめるのも練習場所を確保するのも
大変だそうですが、調和のとれた活
動に、バンドリーダー・土田さんの温



「もっとたくさんの人と、ビッグバンドと一緒に演奏をしたいです。」と土田さん(手前)。ジャズが好きなかた、ご一緒にいかがですか。

かで紳士的な人柄がうかがえます。
狭山ビッグバンド・ピラミッドは
結成目標のとおり年に1回、市民会
館大ホールでチャリティコンサート
を開催しています。そのために毎週
練習に励んでいます。社会人ばか
りなので休まず参加することは大変
です。しかし何より驚くのはコンサ
ートでの選曲。毎回同じ曲は1曲も
ない、つまり毎年20曲以上新しい曲
を覚えなくてはならないのです。こ
うした練習の集大成とも言えるチャ
リティコンサート。当初小ホールで
開催していたところ、入りきれなかつたお客様から「ぜひ大ホールで」という希望があり、3回めから舞台を移して、今年4回めが大盛況のうち
に終了しました。土田さんは、より
多くの人々に良い音楽を聴いてほし
い。と言います。それから、自分達
の活動の陰に大勢のボランティアさ
んの支えがあるからこそ、ステージ
を成功させられる。ということも。
そんな土田さんの夢は、ニューヨ
ークのカネギーホールで狭山ビッ
グバンド・ピラミッドのチャリティ
コンサートを開くこと、と照れなが
らおっしゃいます。その名のとおり
ピラミッドの石を一つずつ積み上げ
るように人と人との音を積み重ね、
いつの日か音楽の頂点を極めて、夢
の舞台を実現してくださることでし
ょう。ビッグバンドならではの迫力
ある演奏と魅力をも、皆さんもぜひ感
じてみてください。

365日、昼夜を問わず 人の生死を分ける最前線で 尊い人命を救うために奮闘

REPORTER'S EYE

消防署救急隊・救急救命士



【リポーター】
青木しのぶさん・ふくさん・一洋
くん親子(下奥宮在住)
リポーターズアイでは、行政のしくみや話題性のあることから、市内のいろいろな施設などを、読者がリポートします。



高規格救急車の中は、いろいろな医療機械などがあって、病院のようで、子どもたちも興味津々でした。

救急救命士を皆さんは知っていますか。私は知らなかったのですが今日お話を伺って、とても大変で大切な仕事だと思いました。子ども二人とお伝えしたいと思います。

救急救命士の仕事は、一口で言うてしまつと、ケガや病気の人を救急車で病院へ運ぶまでの間に、状態を少しでも良くするために必要な処置を施すことです。しかし、こんなことができるようになったのは平成3年に救急救命士の制度ができてからなのだそう。それまでは止血とか、人工呼吸、心臓マッサージなどの一般的な救命処置を救急隊の皆さんが行いながら、病院へ搬送をしていました。しかし、積極的な治療行為やそれに近い処置もできなかった

市には、奥宮の国道16号沿いにある消防本部と市北部の広瀬分署、市中央の富士見分署、市南部の水野分署の4か所に5台の救急車が配備されていて、1台に3人の救急隊員が乗務し、1当直3交代で、24時間体制での待機をしています。そして、毎年救急救命士の養成を積極的に続けた結果、今では11名の救急救命士が配置されるまでになりました。救急救命士の確保は、資格者を採用する方法と救急隊員が研修所で訓練を受け、国家試験の資格を取得する方法とがあり、市では両方の方法で養成しました。研修所での研修は6か月間、全寮制の厳しいもので、お話を伺った北山救急救命士は訓練での厳しい



ストレッチャーは振動も少なく乗り心地はよいのですが、できればお世話になりたくないもの

め、歯噛みをすることも多かったのだそう。それが平成7年に狭山市で第1号の救急救命士が誕生して以来、電気ショックを与えて心臓の動きを回復したり、点滴をしたり、口からチューブを入れて気道を確保するなどの高度な処置を救急車の中で行うことが可能になり、より確実に病院へ搬送することができるようになりました。私も身内が救急車のお世話になったことがあったのですが、救急救命士の制度があれば安心ももっと大きかったかなと感じました。

叱咤と毎日のテストの勉強で、夜の12時に寝ることはなかったそう。

救急救命士の配置に合わせて、救急車もこれに対応した高規格救急車に転換され、本署と3つの分署の全てで救急救命士が使つことのできる器具を搭載したのになっていきます。いざというときの安心が一つ増えたような気持ちです。

「呼吸をしていない人にマスクをかぶせて処置をしたときに、呼吸が回復するとマスクが息で白く曇ってくるんです。そのときは、やったという気持ちになります。」とおっしゃる北山救急救命士。苦勞は特に意識したことはないそうですが、お医者さんの指示に従って行わねばならず、なかなか連絡がとれないときは、薬をも掴みたい気持ちになるそうです。

大変なお仕事の話をして、子どもたちも何かを感じたようで、将来の目標の一つになってくれればいいなと思います。救急隊の皆さん、これからも1秒を争つ救急業務がんばってください。

問い合わせ先 消防署 入念 953
6177